

賛美歌が平和を実現した、そんな歴史があります。それは1941年のクリスマスに起こりました。第一次世界大戦の最中、フランドル地方の最前線で交戦していたドイツ兵士とイギリス兵士が一時停戦状態となったのです。きっかけは12月24日の夜、ドイツ陣営から聞こえてくる賛美歌『きよしこの夜』の合唱でした。イギリス陣営もそれに心動かされるようにして、歌声を合わせます。静寂の夜に、両軍の賛美歌が響き渡りました。そして25日の朝、塹壕から姿を現した両軍の兵士達は、互いに歩み寄り、手を握り、死者を埋葬し、チョコレートや菓子、お酒、タバコ等の配給品を交換し、サッカーをして楽しんだようです。その時のドイツ兵士の手記が残っています。「戦争が馬鹿馬鹿しく思えてきた。すぐにでも早く終わらさなければならない」。しかし残念ながら、この事は軍司令部に知られることとなり、戦いは再開されていきました。それでも、そこで味わい知った温もりや優しさや慰めは、兵士達の心から決して消え去ることなく、今日まで語り継がれています。

「実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、御自分の肉に置いて敵意という隔ての壁を取り壊」されたと聖書は告げ知らせています。イエスが十字架につけられていく過程には、イエスを裏切ったり、イエスを悪者扱いして自分の正しさを証明しようとしたり、“おかしい”と思いながらも罪なきイエスが十字架で処刑されていくのを遠く見ているだけしか出来なかつたり…そんな人間の姿が浮き彫りにされていきます。十字架の出来事が教えてくれていることの一つは、私達の誰しものが、一人の弱さを持った人間、「善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまわっているという法則」（ローマ7:21）を内に抱えた人間であると言う現実です。と同時に、「彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」（ルカ23:34）と十字架のイエスに祈られている存在、神から「わたしの目にあなたは価高く、貴く、わたしはあなたを愛し」（イザヤ書43:4）していると宣言されている存在であるという事実です。それ故にこそ、聖書は「あなたがたはもはや、外国人でも寄留者でもなく…神の家族である」という真理を繰り返し思い起こさせようとしています。

米南北戦争の機運高まる中、E・シアーズは「主イエスを平和の君とあがめ／あまねく世の民／高く歌わん」（賛美歌114番）と作詞しました。賛美歌を共に歌うその時、女も男も、日本も外国も、先輩も後輩も関係なく、主イエスによって一つとされ、神の前に弱くしかし神に愛されるべき一人の人間に戻されていく…そんな平和を実現する歌を教会はこれからも歌い継いでいきます。

（文責：望月達朗牧師）

